

10月1日。森之宮エリアの中央大通り沿いにオープンしたのが、暮らしと学びの実験フィールド『ほとりで』だ。大阪公立大学と、森之宮に約2600戸の賃貸住宅を有する

暮らしを豊かにする交流拠点

“やりたい”想いを、“やってみた”へと育む
新たな実験フィールドが誕生

暮らしと学びの実験フィールド『ほとりで』
大阪市城東区 森之宮団地・森之宮第2団地
2025年●令和7年～



変わる日本の「暮らし」と「まち」



阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

UR都市機構がタッグを組み、新たな交流拠点として誕生した。

「この場所は、まちや団地に住む方や新たに通う大学生、周辺で働く方々など、まちに関わる人々の“やりたい”想いを応援、〃やってみた〃へと育てていく実験フィールドです。会員登録をすれば、ふらっと立ち寄っておしゃべりをしたり、テレワークするもよし。また、飲食や物販などのポップアップショップを開くなど、使い方は自由。例えば、コーヒー好きな方がコーヒーの淹れ方を学び、家族や地域の方に喜んでもらおうとこの場所でポップアップ

カフェを開いてみる。そんな、暮らしが少し豊かになるイノベーションを産む場所になればと願っています」とURの沼野良太は説明する。

『ほとりで』のネーミングについて、URの壽賀野乃花は「〃ほとり〃は、境界が交わる場所としての〃辺(ほとり)〃と、熱を帯びる〃火照る(ほてる)〃の2つの言葉をかけ合わせたもの。〃で〃は、スタートする場所の意味で、ここから多様な熱いムーブメントが広がってほしいという願いが込められています」と話す。

UR旧西日本支社1階をリノベーションしたスペースは、細長い空間を大きく3つに分割。アクティビゾンは、交流・情報発信・チャレンジショップ・飲食などの利用が可能。集中した作業などのためのシェアスペースであるフオーカスゾーンは予約すれば占有も可能で、会議やセミナー、ワークショップにも対応できる。もう1つの共創ゾーンは、大阪公立大学とともに創造的な研究や社会実装に向けた取り組みを支援するためのシェアスペース。Wi-Fiや電源も完備。什器は、工具不要で

簡単に組み立て・解体・持ち運ぶができる「プレイスメイキングキット」を採用。今後も、活



大阪「UR森之宮ビル(UR旧西日本支社)」に誕生した「ほとりで」は、自由な使い方ができる。遊び心満載で使う人の意欲を掻き立てるかも。



用の中で得られたフィードバックを基に、段階的に空間更新をしていく予定だという。

人を繋げ、地域を活性化

『ほとりで』の大きな特徴が、まちづくりコンサルタントの辻田拓司さん、ランドスケープデザイナーの盛岡諄平さんという、2名のコミュニティマネージャーの存在だ。その意義を、辻田さんは「利用される方が、この場所で新しいチャレンジをするためのサポートをするのが大きな役割です。例えば、イベントを行いたい方には企画の相談から許可申請手続き、地域団体や企業、プロへの橋渡しなど、実現までのお手伝いをします。もう一つの大きな仕事は、〃やりたい〃人を発掘すること。そのために、積極的に住民や地域の方とコミュニケーションをとるのも仕事です」と話す。

「やりたいことがある方は当然のこと、やりたいことが見つからない方の〃やりたい芽〃を出してあげるのも使命。積極的な声かけのほか、僕らが率先してやってみて、こ

んなこともできるんだ」と思ってもらうのも大切」と盛岡さん。プレイベントや10月に行われたイベントでは駄菓子屋を出店。子どもはもちろん、大人も「懐かしい」と人気を博したという。

「新しい学生さんも増え、大きく変わっていくこの場所で、地域の皆様と一緒にこの施設を育てていきたい。そして、利用していただいた方同士を繋げ、いずれは地域の中での活動へと展開していけたら」とURの沼野。壽賀も「私がここで見たのは、普段は接点のない高齢者の方と学生さんが、お友だちのようにお話をしている光景。そうして仲間になった方たちが、ここで新しいことを始める。そんな場所にしたいです」と

瞳を輝かせる。『ほとりで』は火く金曜日(イベント時は土日祝も開館)の9時から17時オープン。近くに向いた際は、気軽に訪れてみては

社会課題を、超えていく。

